俺はなァ、偉うなろうとして頑張ってる若い奴を見てるのんが好きや。まあ何が偉いのんかは別として、大望を抱いてる奴が好きなんや。

1981年　筑摩書房

Story

両親を亡くした大学生の邦彦は、生活の糧を求めて道頓堀の喫茶店に住み込んだ。
邦彦に優しい目を向ける店主の武内は、かつて玉突きに命をかけ、妻に去られた無頼の過去をもっていた。
夜は華やかなネオンの光に染まり、昼は街の汚濁を川面に浮かべて流れる道頓堀川。
その歓楽の街に生きる男と女たちの人情の機微、秘めた情熱と屈折した思いが、
青年の真率な視線でとらえられている。
宮本輝氏の川三部作の最後、青春編。川三部作とは、『泥の河』・『蛍川』・『道頓堀川』。

作品の世界

作品の舞台となった道頓堀は、大阪府大阪市を流れる木津川と、東横堀川を結ぶ全長約2.5kmの運河。さらに大阪ミナミの繁華街としてでも有名である。道頓堀に沿う商店街に飲食店が集中。昼もさることながら、夜は街中にネオンがともり、よりいっそうの活気を見せる。道頓堀にかかる戎橋は、平成19年の春を目指して架け替え工事中である。

現在は工事中の戎橋の元の姿

ネオンがきらめく夜の道頓堀

映画紹介

1982年122分

原作
宮本輝

監督
深作欣二

脚本
野上龍雄、深作欣二

製作
織田明、斎藤守恒

主なキャスト

安岡邦彦	真田広之
武内鉄男	山崎努
武内政夫	佐藤浩市
まち子	松坂慶子
ユ キ	加賀まりこ

監督、深作欣二氏は『里見八犬伝』『バトル・ロワイヤル』などで有名である。暴力的作品を撮る映画監督と取られがちであるが、本人が体験した戦争という巨大な暴力をきっかけに、暴力を描くことによって暴力を否定しようという考えが根底にある。『道頓堀川』のジャンルは青春・ロマンスであるため、深作氏の新しい一面がみられるのではないか。なお、宮本氏原作の映画やドラマなどで、図書館で鑑賞できるものもある。

このくだりを読むだけでも価値があります。

「何を観ますか？」
「やっぱり，これからの運勢ですなァ。たいして公欠はないから、金運なんかはどうでもいいんです。私は、しあわせに晩年をおくるかどうか、そのへんを観てください」
（略）
「どんなことが、しあわせやと思いますか？」
（略）
「辛い，悲しいことがないのを、しあわせやと思いますねェ」
「そしたら、辛い悲しいことが起こるかどうかを観ましょう」
そう言われると、武内は違う言い方をしてみたくなった。
杉山の算木を並べる手を止めて、
「辛い悲しいことが起こっても、いっこうにへこたれんと生きていけることが、しあわせやと思いますねェ」と言い変えた。